

空海の一念発起

しかし、自分の見つけた光について記した経典が見つからない。そんな折、夢告によって出会う事が出来た『大日経（大毘盧遮那成佛神変加持经：真言密教の根本となるふたつの経典のうちのひとつ）』。確かにこれは自分が求聞持法で体感したものにつながる経典だと確信した。しかし、その記す所には理解を超えた所もあり、未だに全体像が見えて来ない。そこで空海はこの経典が伝わってきた唐の国に行く事を決意。遣唐使にならんとする。『性霊集巻第七』によると、

积尊の弟子であるわたくし空海は、心内の仏性がわたくしに勧めるように、覚りを得て、その本源に還りたいと願っている。真実の覚りに至るのにどの道を進めば良いか、その岐路に立っては、迷って幾たびも泣いた。わたくしのその心に諸仏が応じて下さり、久米寺の塔の下に秘密の法門である『大日経』を得る事が出来た。しかし、その文に対してみるとその内容を充分理解する事が出来ず、それを知る者もなく、逆に心が昏くなるばかりだった。そこでその請来元である唐に行き、その経について良く知る人を訪ねたいと願った。そのわたくしの思いに仏様の心を宿した桓武天皇が応えて下さって唐に行く事が出来たのだ。

とある。さて、この遣唐使になるに当たっても、親のすねをかじっている。

まず、遣唐使の費用。国の代表という事もあり、渡航に関してはいざ知らず、唐に入ってから、それぞれ入唐の目的が違うこともあり20年の滞在費は各自での用意と思われる。仏道修行だけしていた空海にそんなお金があるとは思えず、お金の調達先としていくつか考えた中で、先ず故郷讃岐の親元に帰ったと思われる。

この時の帰郷は両親、そして親族にお金の援助を頼むのが第一の目的だが、それと同時に遣唐使に選ばれるように働きかけてもらう意図もあっての事だ。

遣唐使となるのも、手を挙げて費用さえ用意出来れば誰でもその一員となれるわけでは無かっただろう。前回の派遣779（宝亀十）年から四半世紀が経っており、平安時代になってからはこの時が初めての派遣である。希望者も少なくはなかったはずだ。

特に空海が加わった、その遣唐使は前年一度、出港しているが暴風雨のため引き返しており、仕切り直しの出立であり、始めの時に空海の名は無い。必要と思ったところには尽力を惜しまない空海のこと、縁故でもなんでも使えるものは使って、何としてもこの千載一遇のチャンスを生かして、遣唐使として唐に渡ろうと思ったはずだ。

良い縁故を持っていそうな人物として、若き日に教えてもらった伯父の阿刀大足は、伊予親王の侍講（家庭教師のようなもの）もしており、皇室との縁も浅からぬものがあるはずだと、まず一番に思いついたのではないだろうか。

またこの縁故は遣唐使の資格である、官僧となる為にも使ったかも知れない。

しかし、仏道修行に専念するために大学を辞めて、十年程も勝手にやって来ていて、お金が必要だからといって親のところに戻ってお金の無心をすることに空海は抵抗無かったのだろうか。全くなかったと思う。空海には信念があったから。とは言え、そこに孝心などは微塵も感じられない。

最大限譲歩して、これを良いように解釈してみると、遣唐使になり、無事帰朝した者は押しなべて国で栄達の道を進んでおり、その一族もその恩恵にあずかることになっていたようなので、その遣唐使としての自分に一枚噛ませておこうという思いがあったのではないかとするのは邪推だろうか。

さて、この辺の事情を親の立場で考えてみると、大学を辞めて、30才になるかという年まで放浪して、この先一体どうなってしまうんだと案じていた息子が、遣唐使になりたいと言ってきた。

遣唐使と言えば、国の代表。すねをかじりに来られて困ったという思いも

1 親不孝者空海

あったが、やっと一念発起してくれたかと喜びと安堵の思いのほうが強く、出来る限りの事をしてやろうと思ったに違いない。

なんとか空海は遣唐使の一員になる事が出来て、親もほっと一安心で遣唐使となった息子を送り出す。

唐に向かって遣唐使船が出港する港には、出立後も無事に航海して唐まで辿り着けるように、そして唐に行っても無事で過ごして帰ってきてくれるように祈る日々を送ることになる両親と、ただただ、これから向かう唐での日々を期待に胸膨らませて思う船上の空海がいた。